

脚気(1) 病原菌の発見

薬学雑誌 1885 年度(明治 18 年)4 月号 p 168

脚気はビタミン B₁ の不足によるが、昔は原因が分からず、長らく伝染病説が有力だった。「東京大学御用係兼内務省御用係・緒方正規氏が本年 1 月初旬より衛生局東京試験所において病屍の内部諸器官を検視し、または大学医学部脚気病室に在る病人の血を採りて試験せしに一種のパチルレン(分殖菌)を発見し、(略)なお之を鼠、兎、猿などの動物に接種し、その発症および死後の解剖的変徴を試験されしに、毫も脚気病者に変ることなかりしを以って、同氏はこのたびその事実を去る 4 月 14 日、朝野の国手をはじめ医業に関係ある人々を招待し、東京大学(神田)の講義室にてその筆紙に尽くしがたきところを詳悉演説せられたり。」

緒方は明治 17 年 12 月にドイツ留学を終えて帰国し、この年から東大で衛生学の講義をしていた。翌明治 19 年 3 月勅令により帝国大学令が公布され、東京大学(第一次)が帝国大学となり、従来の総理が総長となって、5 分科大学が置かれ、医科大学(学長：三宅 秀)に、7 人の教授が任命された

ときの 1 人である(他の 6 人は解剖の田口和美、小金井良精、生理の大澤謙二、薬物の高橋順太郎、内科の佐々木政吉、外科の宇野 朗)。この年 31 歳ながら文句なしの大権威である。

薬誌記事は「演説終わるや、高木兼寛君は立ちて自説を維持して論弁せられ、なかなかの盛会なりし。」で終わっているが、この一文は意味がある。海軍軍医の高木は、脚気の原因が食事にあるとした。そして明治 17 年の練習艦筑波で証明、翌 18 年 3 月 28 日、私立大日本衛生会主催の講演会で自説を発表したばかりだった。しかし、細菌学全盛、理論法則の構築優先のドイツ医学を範とする東大、陸軍は高木説など歯牙にもかけない。高木の反論のあと陸軍軍医監、石黒忠恵が称賛演説に立った。彼はもともと細菌説だから、緒方の大発見を喜んだ。一方で高木に対しても、対立意見の学者こそ真の学者とって褒めているのは余裕からであろう。薬誌の最後の一文も、薬誌編集委員が高木説を軽く見下しているように見える。

以後、海軍からは脚気が激減するが、日清、日露の役で陸軍は多大な犠牲を払う。それでも緒方、青山、三浦、林らの東大と森林太郎らの陸軍は自説を曲げなかった。

小林 力